

# 道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和6年度 第1号 2024年9月30日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

## 令和6年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1次調査）結果

函館水試試験調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2024年8月28日～9月11日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を上回った。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は、登別沖及び苫小牧沖。
- ・ 魚群反応の強い深度は、水深350～500mにかけて。
- ・ トロールにより漁獲されたスケトウダラのサイズは、水深400m付近では尾叉長45cm前後の成魚が主体、水深350m付近では尾叉長30cm前後及び35cm前後の未成魚の割合が高かった。
- ・ 水温は、渡島沖（南茅部沖）の水深100～300m及び胆振沖（登別沖）の水深150～350mにかけては平年よりもやや高かった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振海域の184漁区（登別沖）及び176漁区（苫小牧沖）に比較的強い魚群反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を上回り、2019及び2021年度と同程度の値となりました（図3）。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、主に水深300m以深に観察されました。その中でも水深350～500mにかけて比較的強い反応がみられました（図2・4）。なお、胆振沖（G～H線付近）の水深100～300mにかけてもやや強い魚群反応がみられましたが（図2）、この水深帯の水温から判断するとスケトウダラ成魚の反応ではないものと考えられます。
4. トロール調査を渡島沖及び胆振沖の水深350～400mで実施した結果、採集されたスケトウダラは渡島沖（鹿部沖）の水深400m付近では、尾叉長45cm前後の成魚が主体となっていました。胆振沖（登別沖）の水深350m付近では、尾叉長40cm以上の成魚の他、尾叉長30cm前後及び35cm前後の未成魚の割合も高くなっていました（図5；トロール地点は図1右上図参照）。
5. 調査海域の水温は、南茅部沖（D線沖の観測点）の水深100～300m及び登別沖（H線沖の観測点）の水深150～350mにかけては、平年（2002年度以降の平均値）よりもやや高く（1℃前後）なっていました。スケトウダラ成魚の生息に好適とされる5℃以下の水温は、胆振沖及び渡島沖とも水深220m以深となっていました（図6；水温観測地点は図1右上図参照）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11月）の状態を予測するために実施しているものです。12月以降の状況は、11月中旬に実施する分布調査（2次調査）により予測する予定です。調査終了後に改めてスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

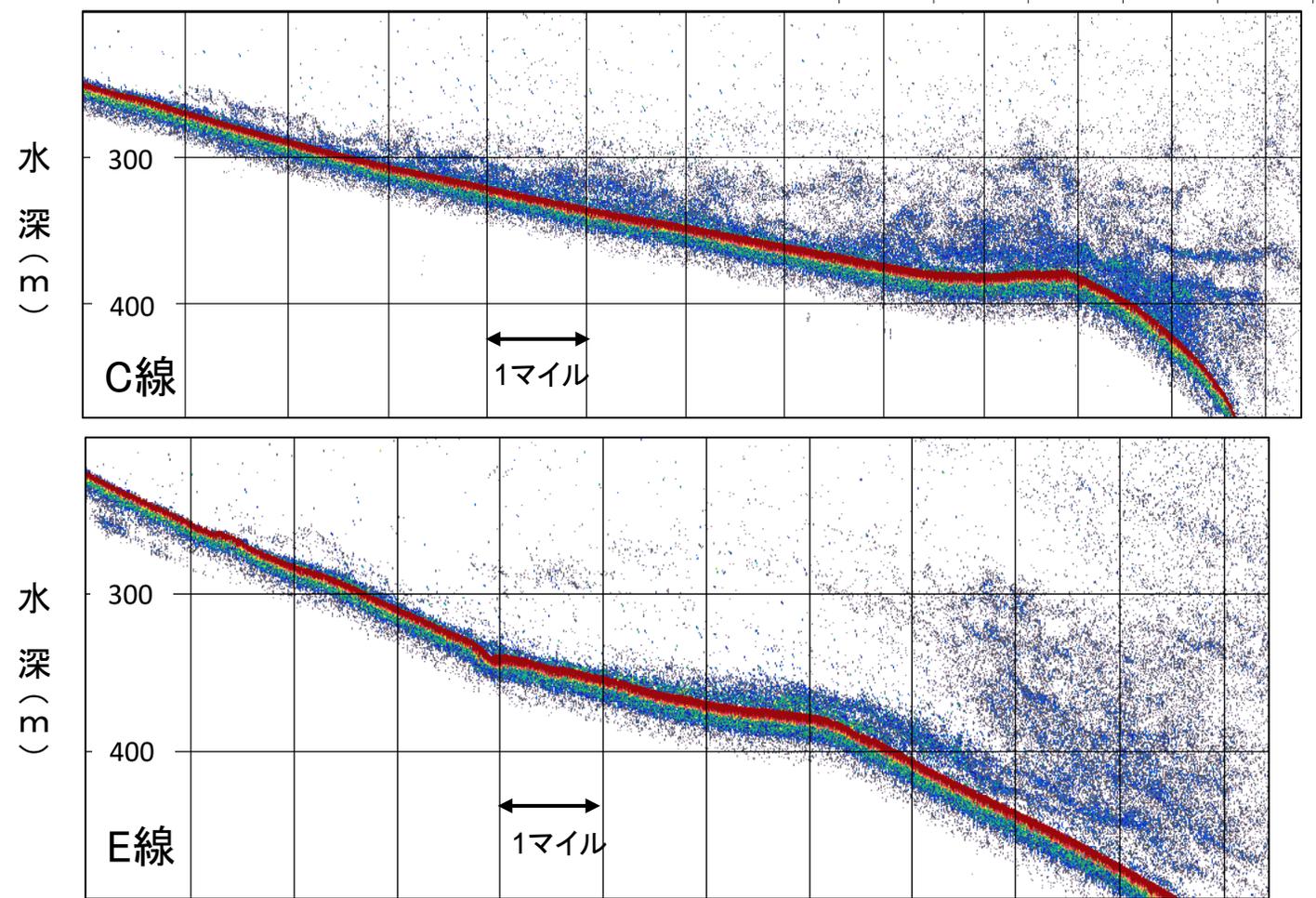
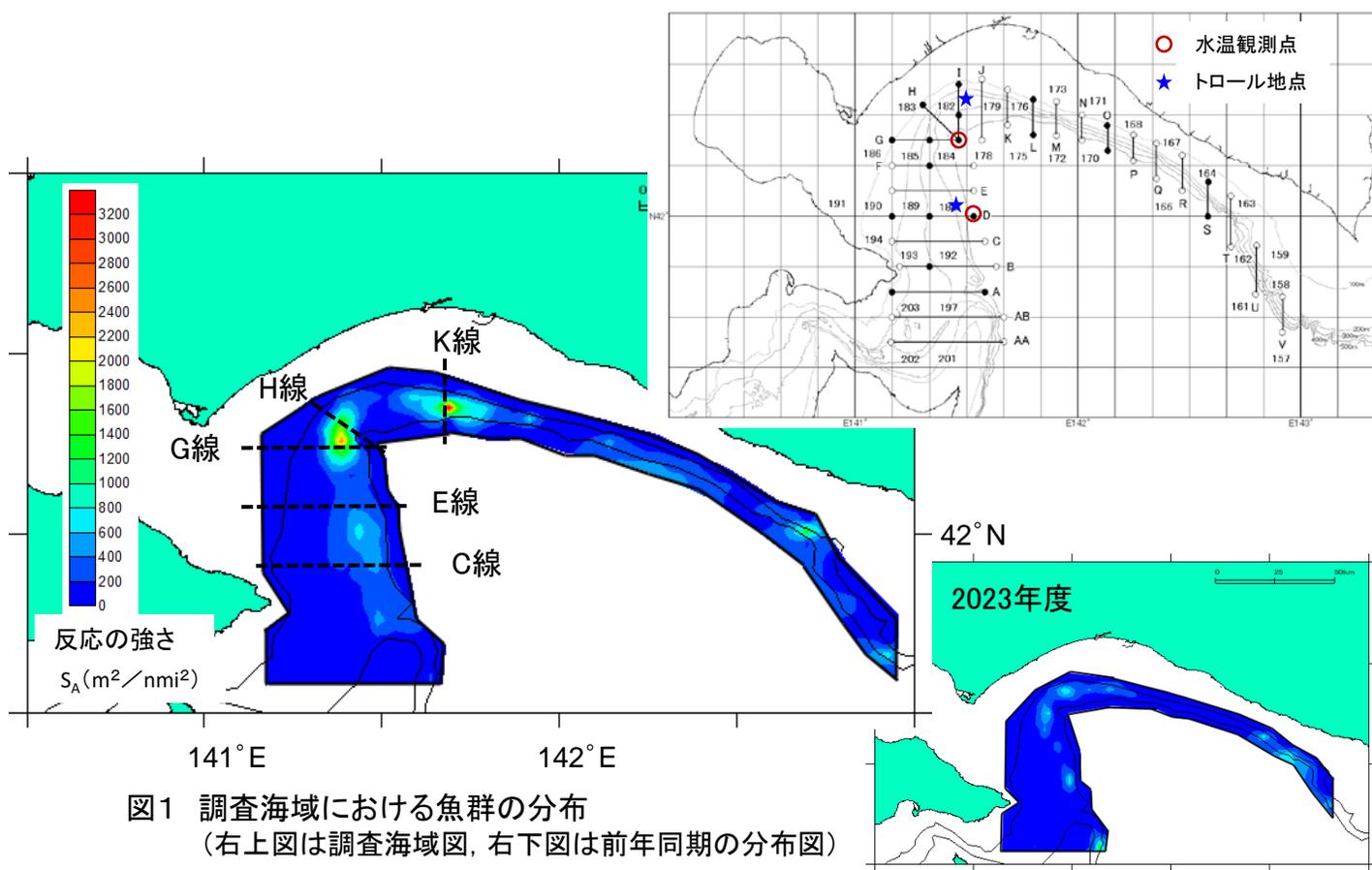


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

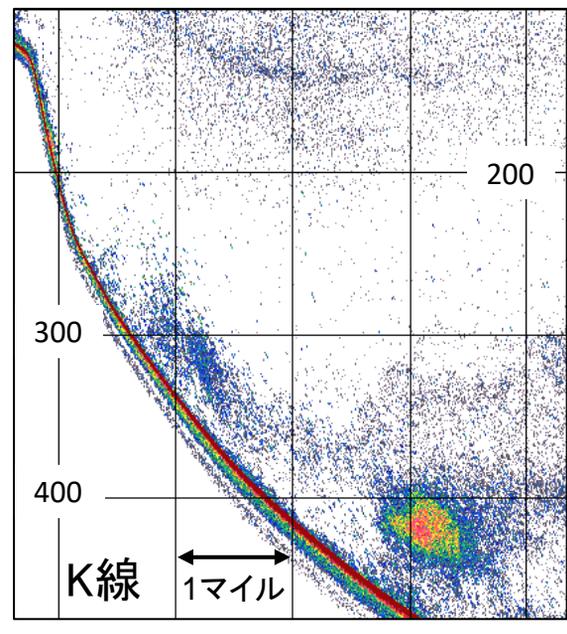
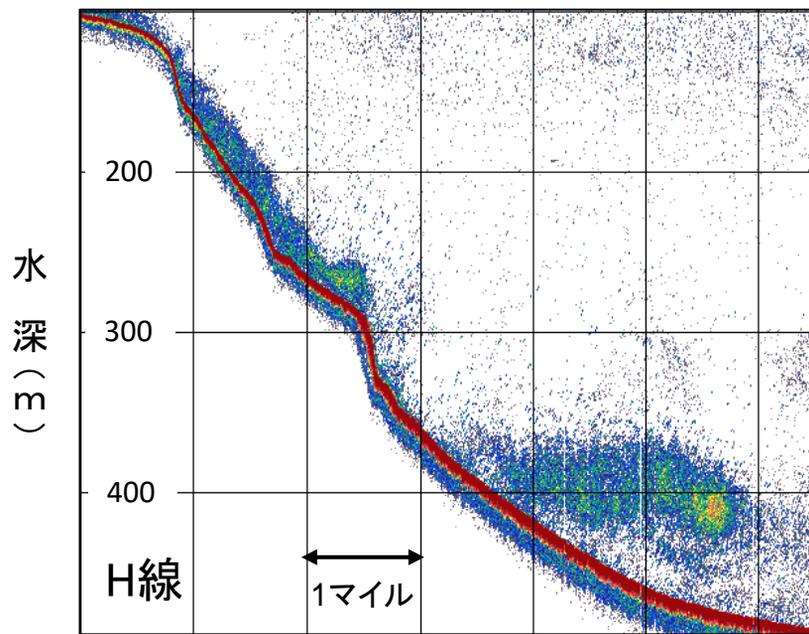
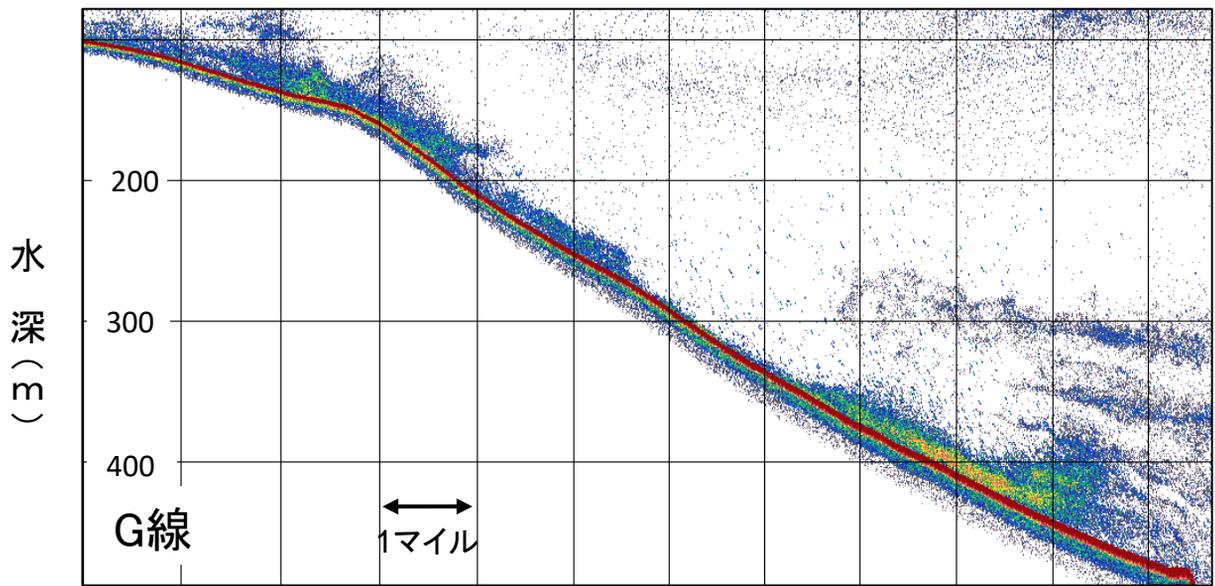


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

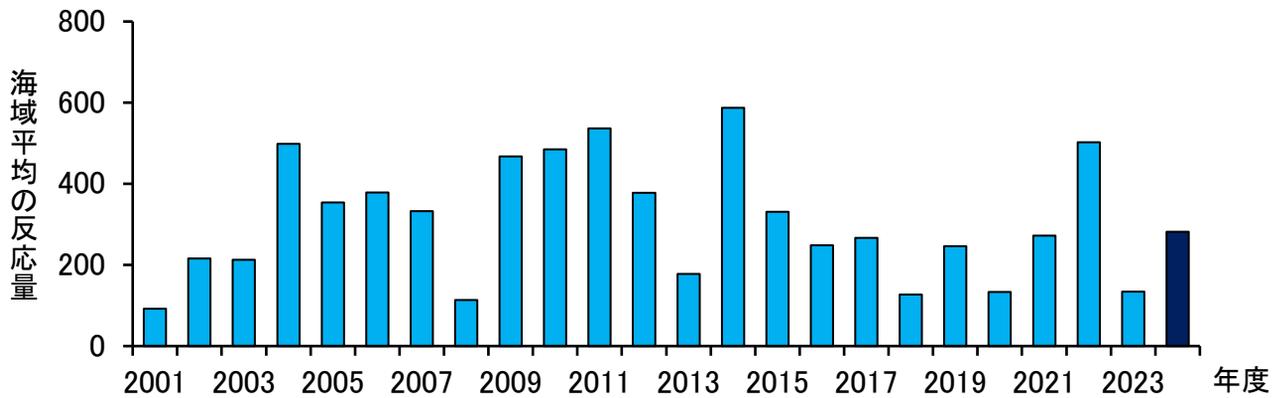


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

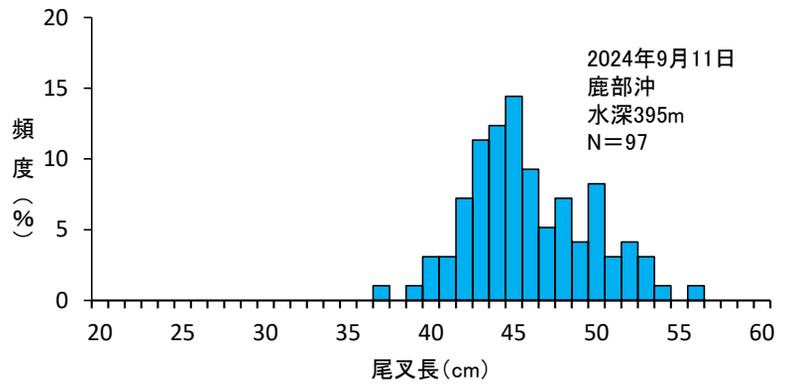
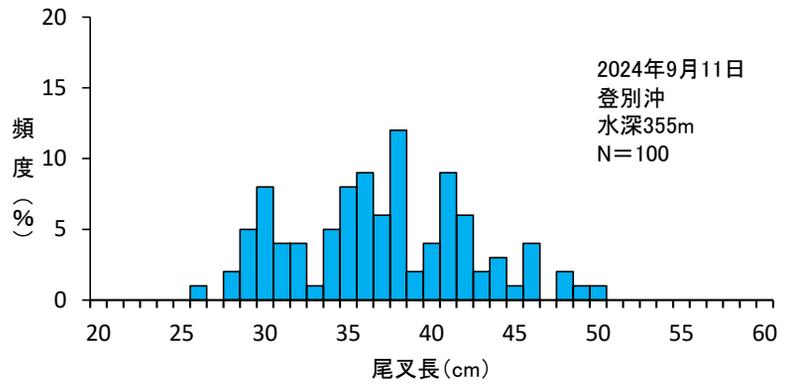
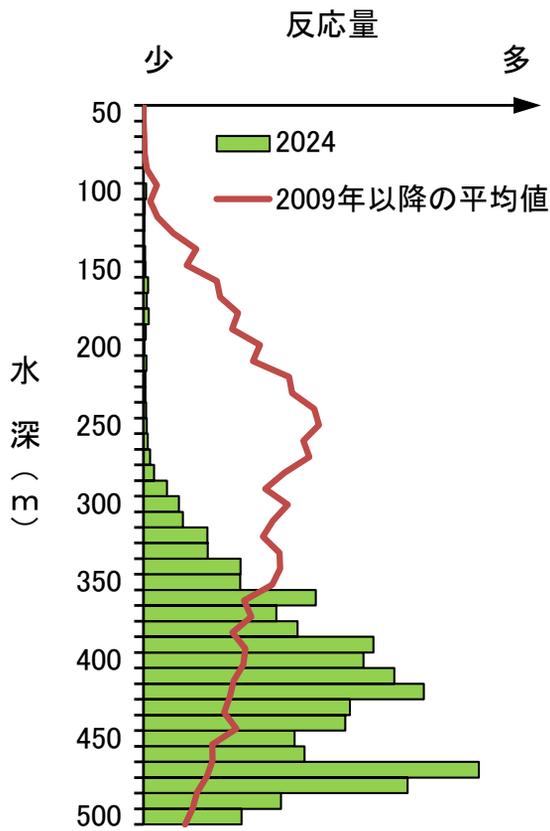


図4 水深別(10m間隔)の魚探反応量

図5 漁獲物の体長組成

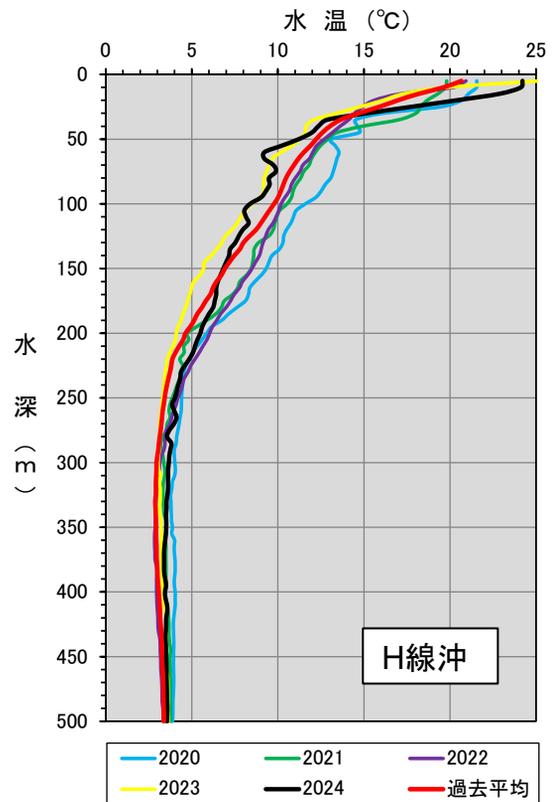
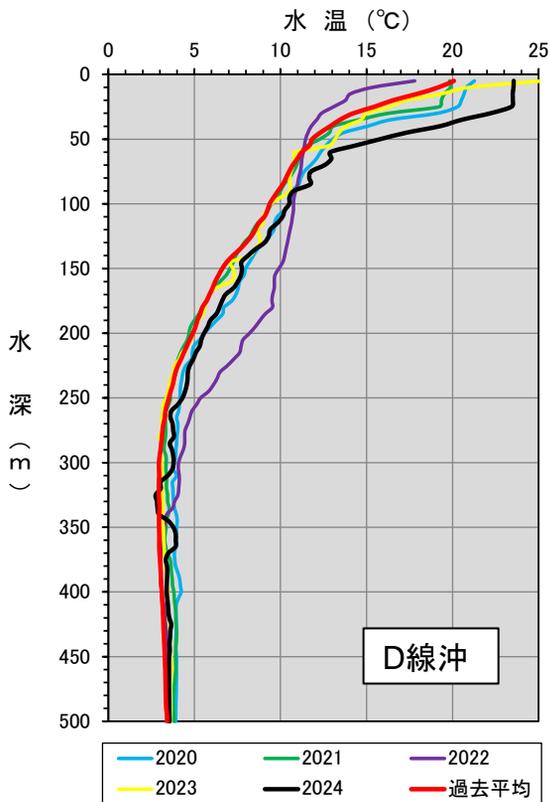


図6 8月下旬における水温の鉛直分布

左:南茅部沖(D線上), 右:登別沖(H線上)

(過去平均:本調査における2002~2023年度の各調査点の平均値)

※この調査の一部は、水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。